

新春所感

—日野病院での白内障手術—

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



新年早々、うれしい便りを受け取りました。

「オシドリの里、日野町の病院で白内障の手術をしてもらった。2週間入院したが、万事順調に運び、街並み、山並みがくっきりと見え、明るい春を迎えることができた。術後の痛みもなく、翌日、眼帯が外された時に目にした爽やかな青い空の色、眼鏡なしで読めた細かい文字に感激したことを今でも忘れられない」と。

これは、白内障による高度な視力障害のため数年前、車椅子に乗った状態で入院された当時84歳のKさんからの便りでしたが、退院後は一人で通院され、今ではすっかり社会復帰しておられます。

本院での白内障入院手術患者第2号であった義母が、退院時にいみじくも私に語った「こんなにのんびりさせてもらったことはない」との一言が忘れられません。白内障入院患者さんに、開眼の喜びとともに「人生の安息日(?)」を体験していただけるのも、私を含めスタッフ一同にとって、とてもうれしいことなのです。

平成28年12月末で手術開始丸15年3カ月が経過した今日、その間手術室では、1434名（男性540名、女性894名、比率にして男性37.7%、女性62.3%）の主として加齢に伴う白内障手術、延べ2257件を施行しました。年齢は43歳から102歳の平均77.3歳でした。80歳以上の方は551名（全体の38.4%）で、性別では男性が185名の33.6%、女性が366名の66.4%を占めており、今回の女性優位の高齢化社会を反映する結果でした。ちなみに、当院での最高齢白内障手術患者は、男性で98歳、女性で102歳でした。

外来での白内障術後に発生する後発白内障手術件数242と合わせ、上記手術開始後の白内障関連手術件数は、合計2499件でした。

手術室使用の白内障手術は原則として、小切開超音波白内障手術+眼内レンズ挿入術を施行していますが、高齢過疎化の進む山間地域の中核病院としては、交通の面も含めて、手術翌日からの通院を強制することができない諸般の事情があります。術後の合併症の一つである眼内炎の予防には、術前後を通じてしっかりとした抗生物質の点眼加療が一定期間必要ですが、脳卒中後遺症で手が不自由な方や高度の認知症のある方などでは、自己点眼ができないことがあります。しっかりした介護者がおられたとしても、家庭では24時間のケアが無理な場合もあり、高齢化社会を反映しての独居や老老介護の場合には、通院を含めて術前術後のケアには限界があります。

そこで、あえて日帰りないし短期滞在手術をお勧めせずに、白内障手術希望患者の全ての皆様に、片眼で1週間、両眼で2週間前後の入院手術をお願いしています。

入院期間中には、病院敷地内は全面禁煙ですから、希望者には禁煙外来受診をすすめたり、糖尿病や高血圧などのある方には、栄養管理や運動療法の具体的な指導を受けてもらったりもしています。さらに、リハビリ継続が必要な方には、入院中症状に応じて対処していますので、ご安心下さい。

鳥取大学眼科の井上幸次教授はじめ多くの医局の先生方の絶大なご支援を得て、近代設備のもとに、最新のテクニックを駆使して各種の白内障手術を施行していますので、今後ともよろしくご依頼申し上げる所です。

新春にあたり、日野病院での白内障手術の現況を述べさせていただきました。